

いま何が危機なのか

林業家は本来、林業を行なうことで生活できれば、何も考えなくても、自然と森林の公益的な役割や保全につながっていくものです。しかし昭和二九年（一九六四）から、外国の木材に對して関税もかけずに、林業のインフラ整備や、林業従事者が生きていくけるだけの産業政策もないまま、安い外材の輸入が始まりました。経済的な価値を失なつてしまつた国内の人工林からは、多くの林業家が廃業して去り、残された森林は荒廃の一途をたどっています。

一方、昭和三五年に「燃料革命」と謳われ、石油・ガスが薪や炭に取つて代わり、天然生林は人工林以上に人の手が入らなくなつてしましました。

これには、昭和三〇年代後半から国策としての一次産業から二次・三次産業への日本の工業化の大変革を、国民の多くが善しとした時代の背景があります。豊かさの中心が、経済の発展というところに集中したわけです。

安価な一次産品を外国から輸入し、工業製品を輸出した結果、わが国は経済大国となり目的は達成されました。

しかし気がつけば、山で働く人たちがもういなくなり、人の手が入らなくなつた森林は荒廃の一途をたどつていたのです。森林の荒廃の状況がこのまま続くと、木材資源としての価値どころか、木材資源以外の効果としての森林の価値すら損なわれ、取り返しのつかないことがあります。

戦後すぐの日本の森林は、国の復興資材として過伐・乱伐され、伐り過ぎたための危機がありました。そして現在は、森林の管理・整備を木材としての価値に大きく依存した結果、採算がとれないことから林業家がいなくなり、伐らないがゆえの危機を迎えているのです。

また大切なことは、林業は木を伐つて利用するだけの産業ではなく、次の世代のために木を植えて育てていく産業でもあるのです。

もし日本から森林が無くなつたら……

平成二二年（二〇一〇）、国連が定めた生物多様性の国際会議「COP10」が名古屋で開催されました。これからの一〇年間を、地球全体で温暖化問題と併せて考えようという最初の年でした。